二月の御教え

寿命のない者にも寿命をお授けくださる。それなのに、中には、死ねばくつろげるのにお迎えが来ないなどと、わが身から覚悟をし、命を縮めるようなことをいう。愚かなことではないか。死なねばくつろげないくらいの人なら、死後も安楽はおぼつかない。

……「天地は語る」第六十一条……

解説　四代金光様の御歌に「宇宙の中　天地自然と　ともにある　たった一つの　命なりけり」とあるように、私たちの命は、かけがえのない至上の賜物であり「人はみな、神の分け御霊を授けてもらい、肉体を与えてもらって、この世に生まれてきている」のであります。

そして、「生きている間も、死んだ後も、天と地はわが住みかである。生きても、死んでも、天地のお世話になることを悟れ」との御教えのごとく「この世における人生」も「死後の御霊としての存在」も、分かつことのできぬ大切なものでありますから、冒頭のような「死後の安楽」を願うなら、生きているときに「実意丁寧」「御礼・感謝」の信心生活に勤しんでこそ、得られる道理であります。

今年は、教祖百四十年の御年柄、共に一層信心の稽古に勤しみ、生死を通しての安心立命の大神蔭を頂きましょう。